

古墳の始まりと終り

末 永 雅 雄

今日の会合は考古学専攻の皆様を主にしてありますが、公開講演という性格から部外の方々もかなりみえておられると思いますので、この主題に入るまえに、一応古墳という考古学上の研究対象について、概略を申しさえることにします。

現在日本の考古学界の見解では、だいたい動きのない時代区分として、五世紀を中心に大規模に土を積み上げる墳墓の方法がありますが、この時代が三、四百年続いていたようで、堺市の仁徳陵はその最も大規模な資料であり、また南河内郡の河南町の用明・推古・聖徳太子の各陵墓は、盛土の規模が小さくなり、形も内部構造も変化し、それぞれの比較をいたしますと、仁徳陵のようなりっぱな前方後円墳と、用明・推古のような四角な形、聖徳太子の墓の円形そして埴輪の有無、それぞれちがひがあります。応神・仁徳の時期と申しますと、すなわち五世紀頃の古墳になります。そしてこの時期は、日本古墳の最もさかんな時代であったことを示しております。

私はこうした最盛期の古墳の前段階はどうか、そして終りに向かい、次の文化と交替するのにどういふ過程を示しているか、ということをかかなり以前から観察を続けていました。今日皆様方の前に立ちまして、はっきりとこれに対する結論的な成果を申しあげざる事ではできませんので、むしろ古墳の始まりと終りを考えますのには、どういふ方法と見解をもってすればよいかという、目標を皆様方にお考えになっただければよいか、などについての私見を申し上げます。だからご質問になられましても答に困ることになると思ひますので御遠慮ねがひまして、私の考えようとしておりますことを時間いっぱいお聞きねがひます。

いわゆる高塚古墳は、どんな過程で育ち、そして大規模の前方後円墳に発展したかということ、いまさら私がとりたてて言うまでもなく、考古学界の重要な関心事であり、多くの研究者がいろいろと考えておられることであります。私もまたその一員であるにすぎませんが、前方後円墳が四世紀頃に、我が原始時代以来の墳墓のありかたから、大きく浮びあがってきますことを、考古学と古代史の学界ではその発展現象を非常に重視しているわけでありませう。かつ、前方後円形の起源の問題にも直接関連を持つことになりませんが、この形式出現の前段階を、弥生式墳墓との関連において考える必要があるのではないかと思いますが、高塚古墳の現段階では、弥生式文化との間に若干の空白があるようにみえます。

最近の資料では、若干これをうめるものが出てきているようでありまして、まず原田大六氏の調査されました福岡県の平原弥生古墳といわれるもの、あるいは村川君が主査となつて調査をされた尼崎の田能、あるいは藤井君が主査の大阪府の瓜生堂、及び鳥越氏が調査担当されています勝部の弥生式遺跡、こういう所でそれぞれの墳墓がかなり発掘されました。ことに平原弥生古墳は原田氏の提唱される、北九州の弥生文化と古墳文化をつなぐ遺跡として重視すべき事実であります。これに対して、岡山県で近藤氏等が調査されました類似の遺跡があります。

こういう点で田能・瓜生堂における埋葬人骨をもって、すぐに高塚古墳に導くのは飛躍致しますが、従来私は近畿地方での弥生式人の墳墓のあり方について、このことを考えておりました。これについてやや具体的な見解を昭和三十六年に刊行の「日本の古墳」に記しておきましたが、また北九州の甕棺墳墓が成人骨を収めた形でもって散在し、あるいはさきほど国分氏の御説明のようなあり方の墳墓が実証されうることに対して、近畿地方では甕棺以外の弥生式墳墓が現在まで知られていなかったのは、死体処理の方法が違っていたからであろう、弥生式遺跡が多数分布することに反して、この現象はやはり注意を要する事ではないか。そして弥生式と古墳時代との文化が上下に連結することを認められている現在では、弥生式遺跡を残した多数の人達の墳墓がどこかにあるはずであるから、のちに高塚古墳の盛行した近畿地方のどこかで、なんらかの形で弥生式人の墳墓が検出されるはずである。もう一つの問題は、土

を掘って埋めた場合には、それだけ土が盛り上がって、小規模の封土ができる。こうしたことが高塚古墳発生への初步的現象になるのではないか。大規模の前方後円墳はこうした素地に立ち、大陸の墳墓の思想と構造的影響を受けて、この場合には文化の発展とともにむしろ急激な進歩を示したのではないか。

私はいままでもう一度の見解は認められるかどうかを危惧しながら、弥生式と古墳との中間に注意してきました。ところが、まず田能遺跡で木棺におさめた人骨を見まして、その時代の判定から何か古墳時代との連関がありそうに思われました。偶然かもしれませんが、古い伊丹の地図の中で、ちょうど田能遺跡の付近に、二つの古墳のしるしを付けたものがみつかりました。これは測量者は古墳としてマークをしていますが、実体はわからず、ただ盛土があるために、測量者の常識的な取り扱いをしたにすぎなかったかもしれない。しかしその半面、私にとっては見逃すことのできないものと思っています。田能遺跡の発掘現場とこのマークがどれだけ密接さをもっているかはわかりませんが、今日のように急速な開発にかからない地域での地形・地物との関係から、地下に埋蔵する遺跡、遺物を確認した例が多いので、この場合にも何か手がかりになればと思っています。と申しますことは、以外に古い地形・地物が残っています、その場所に遺構が埋蔵されているというような場合を、従来われわれはしばしば経験を致してきましたので、今こういうことを御参考に申し上げるわけがあります。こうした弥生式の墳墓に小規模ながら盛土のあるのを近畿地方のあちこちで見つかるようなことになれば、そこで高塚古墳出現への関連を考える前堤になる場合があるのではないのでしょうか。私はかようなことを考えつつ現在にいたったのでありますが、田能・勝部の遺跡は、あるいはその一環としてみる時期がくるのではないか。そうなれば私の夢も実現に近づくことになります。

そのためもう少し積極的に進める方法がないかと考えました結果、思いつきましたのは、現在の弥生式遺跡と古墳群が続いている地域への着眼であります。これは全国的にみる必要もありますが、いずれにいたしましても発掘調査を伴うことでありますので、私の独力はとうていどうにもなることでありませんから、この点につきましては各地で研究をなさっておられる皆様によって、その現状をつかんでいただきたいと思います。

私自身といたしましては、和泉の四ツ池、河内の高安、摂津の加茂、大和の新沢などの弥生式遺跡と古墳、つまり弥生式人の墳墓とつながることにならないだろうか。その意味では有名な新沢の弥生式遺跡のすぐ東方で丘陵地を占める、いわゆる新沢千塚の群集墳との地理的な近距離関係が、やがて人間的な関係におよんでくるのではないかと、予測をもって調査を進めてきましたが、新沢千塚群は、はじめわれわれが漠然と考えていました後期の群集墳の範囲を越えまして、四世紀にはいるのではないか。そして多数の古墳の中には、意外に時期のさかのぼるものもかなり含まれているらしいこと。古墳の基底部、すなわち古墳の造られる以前の地表には、弥生式土器、石器などの破片がかなり分布し、古墳の封土中にもかなり混入していました。封土も遠方から運んできたものではなく、現在位置の土砂を使用したものといえますと、弥生文化との関連をこの古墳群の場合にも考え得る資料になるのではないかと、思います。

地点によりますと、縄文式遺跡もみつかりました新沢千塚は、はじめてここに古墳文化ができたのではなく、早くその前に先行する文化のあったことは確認されています。それがすなわち弥生式の時期に続いてくると認められるわけです。その結果新沢千塚の成立と西方に所在する、弥生式遺跡とも直接つながるものもあるのではないかと、弥生式遺跡と古墳と連結してみようとする私の考えの基礎には、弥生式人は丘陵か川原、もしくは不毛の地に墓を造ったのではないか、新沢の場合には東方の丘陵が最も利用しやすい場所ではなかったか、それが現在の千塚という群集墳の出発点になったのではないか。これには幾分飛躍した考えもまじりますが、全国的な地域調査により従来の調査成果を多少とも今後の調査に加えて運営ができるのではないかと、いう点がありますので、各地の弥生式の研究者はいま申しましたようなところに、ひとつ観点を置いていただいたらどうかと思います。

新沢弥生式遺跡と千塚は直接私が前述のような意図をもって調査に従事してきたわけですが、こうした現象から日本古墳の始まりが突然変異的に大形前方後円墳が現われたのではなく、弥生式文化の充実と生活の安定、そこへ大陸の影響を受けて、ある時には徐々にそうして一層進んだ社会的背景のもとに急激な発展に導びかれて、大規模

の前方後円墳の出現となったのではないか、こうした点について皆様方にお考えいただきたいと思えます。

次に古墳の終りに対する見解でありますが、これはやはり大化薄葬令を無視してはならないことであります。大化薄葬令の発布はちょうど七世紀の中葉にあたりまして、一般には六世紀後半に入り古墳の築造が下向をたどり、横穴式石室の方墳が前方後円墳にとってかわるようになり、前方後円墳自体にも旧来の伝統を失ないまして、新様式を取り入れた変形形を示すこととなります。この現象は後期古墳の時期を考察するためにやはり実際上の判定基準となることであります。大化薄葬令は大きな転換期を与えたことになりましょうが、詔勅の初めに「もろこしの君がその臣を戒しめて」という前置をしまして、薄葬を実行するという段階に入っております。そして日本では薄葬の普及をするにあたり、中国の思想を取り入れ、従来の厚葬の弊害に対する社会的反省を述べている点に着眼する必要があります。これは大化薄葬令によって古墳築造に制約を加えたというよりは、社会がすべて厚葬から薄葬へ、そうして古墳文化が終りに向いつつあることを示しているものとすべきではないでしょうか。

このあたりは考古学と古代史が、緊密な提携をもって追究をする必要のある部分だと考えますが、日本の古墳全体といたしては終りに向いつつあったことは確であり、たとえば竪穴式石室を主体とした前方後円墳が横穴式石室を採用し、占地状態も、丘陵地に復帰し、それに対して、四角な封土形式の大形古墳の進出をみるようになります。これには用明・推古のような例が考えられます。しかしこれも畿内の大和・河内の地方を主として、他の地方ではあまり大型な用明・推古のようなものをみませんのは、やはりこの形式の短期間に終ったことを示すことではないかと思われまます。しかしこれも古墳文化全体が急速に下り始めた結果と見るべきでしょう。大量の封土を築き上げました高塚古墳から申しますと、もはやこの時期、畿内もしくは近畿地方では七世紀前半で、古墳の終末期を迎えたという見方ができますが全国的には、これでは少し古墳文化終末の一線を画するのは早すぎる場合も考えられるように思えます。特に各地域ごとにみますと、関東及び東北・北陸地方に現存する古墳の構造と遺物から、色々の残された問題が提起されています。これ以外、近畿地方には法隆寺裏山付近出土では漆ぬりの石棺、あるいは他の古墳で乾漆棺を埋

葬した横穴式石室、もしくは一般の横穴墳墓も高塚古墳の延長としてみると、八世紀上半頃まで年代を下げなければならぬ資料もあることはあります。しかしおそらくここまで古墳時代をさげようということは、古墳文化全体の考へ方にも異論のあることと思ひますので、この点につきましては以上のことは御参考までに申し添えます。したがってこれよりさげられることはありませんが、関東地方の古墳では七世紀後半頃まで、古墳文化が継続したのではないかと思はれる現象がときどきみられます。古墳築造における構造の点もありますが、古墳の年代判定につきましては、構造だけでは資料が十分ではありませんので、副葬遺物がやはりある判定の分野を占めることと思ひます。

従つて関東地方の後期古墳で出土する副葬遺物が大和・河内あたりの後期古墳に出土する遺物と、よほどその様相を異にすることがありますし、明治の末年から大正にかけて発掘されました各種の遺物、ことに最近では芝山古墳と上総の金鈴塚のような古墳で見られるものは、後期古墳あるいは古墳文化の終末期に続いてくる遺物ではないかと考えられる点が多いのであります。私が従来みてきました遺物による時期の判定、従つてこれを拡大し、古墳の外形・構造にも及ぼすことであります。特に私は遺物を主とする調査をかなり進めてきました。関東地方における古墳の遺物の中で環頭大刀の若干例、あるいは変形は致しておりますが圭頭大刀の二・三例、もしくは銅鏡、あるいは須恵器の中の若干例、甲冑の内冑及び挂甲の小札の型式とその威し方の状態、勾玉の各一・二の例をみまして、古ければ六世紀後半ぐらいに入るかもしれないませんが、下がれば七世紀初頃ぐらいにおくこともできます。銅鏡の年代はあるいは八世紀に近くなるのではないかと推定されるものもあります。これは私だけの見解でありまして、皆様方と見解を異にする場合もあると思ひますが、今私が申しましたことはこの方面の研究者で特に御注意願ひたいと思ひます。早稲田大学の瀧口氏の芝山とか金鈴塚という資料につきましては、関東全体の古墳の出土資料と古墳の構造とに注目していただければ、いろいろ私達にも教えられることも出てくるのではないかと思われまふ。話は少し細かくなりしましたが、かような例と、これに対照すべきものは埴輪であらうと思われまふ。

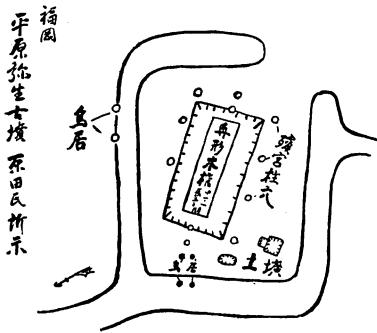
埴輪の起源につきましては、書紀には殉死にかえて創始されたと伝えられ、その意義はいろいろ討議されています

が、作る時から底に孔をあけて埋められた土師器が、十数年以前桜井の茶臼山古墳の調査以来あちこちで資料が出ています。これはいわゆる埴輪の起源と考えられる資料と思っていました。今度ごく最近に大阪府の調査で、藤沢君らの発掘による土師器の壺を埋めた古墳が、河内の壺井八幡社附近で見つかりました。これらはやがて円筒埴輪への発展過程を示す見解が成り立ちそうであります。形象埴輪の発展となりますと、これはまた相関連して調査をする必要がありますが、前期古墳のどの時期のどのあたりに埴輪の発現をみることになるか、こういう問題もたくさんに残されていることと思います。土師器は弥生式土器の系統の土器であり、埴輪もまたその関連性を持っていることを考ますと、この方面に対するいろいろの見解をくわしく進めていただきたいと思ひます。特に関東地方で製作された各種埴輪の研究、これは埴輪をつくった時のモデルの人物、各種の服装・器物の実体と相応じまして、後期古墳の推移を把握するところに必要な資料ではないかと思ひます。

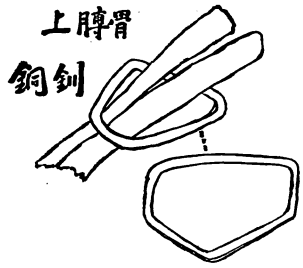
以上古墳の発現と終りに対する私見を一通り申し述べました次第ですが、その前段階として、弥生式農業における経済力の充実、あるいは生活の安定・社会的秩序のまとまりとかを、やはり考えなければなりません。終末段階には厚葬に対する一般的な反省から多数の労働力をかけて、大切な財宝を土中に朽ちさせる資財の損失を、自然と考えるようになった結果、こうした現象を招来するに至ったのではないのでしょうか。そして文献との関連を深く考えなければ、究極のところこれを解明するのは困難であろうと思ひます。しかしわれわれ実際遺物を取り扱う考古学の間人が、文献と実際の両刀使いになるのはなかなかむずかしいと思ひますので、やはりこの場合古代史の人達との緊密な提携が必要と思ひます。事実古墳終末期に、ここに埋められた人々は古代史上に活躍した著名人であり、副葬遺物はそれに連なることは当然であります。かような点でごく大ざっぱな着眼点を申しました。この程度で私に質問されますと答えにこまることも多いと思ひますが、逆に皆様方から、「お前はそう考えておるが、わしはこう考えている」と御教授いただくことをお願ひします。少し絵を持ってきましたので若干補足したいと思ひます。この絵のこと

につきましてもいつもうしろ向きに歩いている私は、この教室に反射幻燈の精巧なものがあることを知らなかった、その幻燈機はわれわれが四十年前に使った反射幻燈機で本を入れても写る、物をいれても写る、写真をいれても写るといふ四十年前の反射幻燈と思つてのんびりしておりました。ところがいよいよテストをしましたところが全部絵を書かないと写らない、精巧すぎまして、もうわれわれの手におえなくなつてきました。そこでいたしかたありませんので、竹ペラで遺物を掘り出すように一枚一枚二三日前に絵を書いてみました。三十年ぶりぐらゐにまる二日、絵をかくことに費しました。これは私にとつては非常に勉強になりました。ですけれども素人の絵でありますので御覧になつて理解ができるかどうかわかりませんが、そこはひとつ御勘弁願つて足りないところは言葉で説明致します。

日本の古墳の初源の形式を考へるときに、さつそくこの平原弥生古墳(第1図)をもち出しましたら、あるいは異論もあるかと思ひますが、原田大六氏のこの調査では実際におきましてはやはり、盛土のある古墳、そういうものゝたいして、さうとう今後、われわれが注意しなければならぬかと思ひますのでとりあげました。まわりに隍があつて、少し高くなつており、それから、殯宮の柱穴とか鳥居跡とかいふ想定をしておられます。この場合は直接原田氏に教示をおくよりしかたがないと思ひますが、私はそこでこうした構造と舟形の木棺というものが、のちの古墳時代への影響を考へる場合の資料になるのではないかと思ひます。さきほど国分さんの話の中でも、やはりこれに関連する九州地方、あるいは中国地方の九州側の弥生式の墳墓でいろいろ考へさせられることがあります。しかし今日は特に私が調査に参加したり、あるいは手がけたものによつて資料を御覧にいれたいと思ひます。この話がござつぱですが、絵はすべて模式図で実測図ではございませぬので、そのつもりでござらんを願ひたいと思ひます。



第1図 平原弥生古墳



第2図 田能銅劍

田能遺跡(第2図)は、すでに報告でも御覧のように沢山の木棺が出ています。そして管玉が多数にあるとか、勾玉があるとかいう、遺跡と同時にやはり遺物との関係、これは十分注意しなければならぬと思います。特に上膊骨に銅劍がはまっている、こういう事実はこの場合では弥生式時代の問題でありますけれども、後へ続く可能性ということを考えましてとりあげました。木棺、それから弥生式土器の形式に注意をしなければなりません。

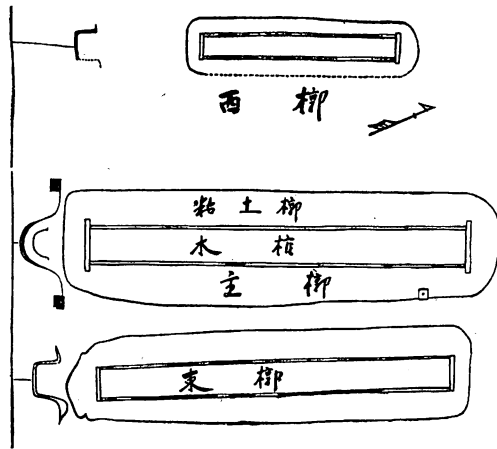
つぎに瓜生堂(大阪)であります。藤井君から絵の原図をもらいました。ここで私が申したいのは弥生式の木棺であり、またこういう形式がどの時期に古墳時代につながってくるかという問題ですが、それぞれその間には相当なギャップがあると思います。しかしこのギャップをどのようにうめていくかを私も考え、又皆様方にも考えて頂きたいと思えます。

新沢(奈良)の古墳ではずっと長く連続した土器包含層の線があります。そこからは少くとも楯目の時期としましてはあまり下らない時期の弥生式土器が出ています。だから古墳とをすぐ結びつけようというのではありませんが、こうした事実があるという事をお知りになって頂きたいのです。

かように絵をならべますと、その間にどの位のギャップがあるかと言う事を無視した事になります。その間にあるへだたり、年次的なへだたりを考えお聞き願いたいと思えます。

第3図は和泉黄金塚の主榑と東榑と西榑であります。景初三年の銘のある鏡が出ました。この銘につきましては学会ではいろいろ意見がありますけれども、この古墳でわれわれが、われわれ関係者と発掘しましたのは事実で、私自身がどこかの工事現場で拾ってまいりまして、そうして資料として学会に提出したものではない。この点は多数の参加者がいる所で確認したものであります。鏡が舶載鏡であるとか、あるいは仿製鏡であるとか言う事につきましては、これは又皆様方のお考えにまかしておきます。この場合、粘土榑で木棺を包んでおります。ですからこの木棺が

和泉養全塚粘土柳木棺



第3図 棺・柳配置図

前に挙げました弥生式の木棺に直結したものであるかどうかという事は断言できません。おそらく先程の弥生式のものから、この辺に発展してくる間にはある年次的なへだたりを考えるべきだと思いますが、一応整理して並べてみますと、こう言うことになるわけです。

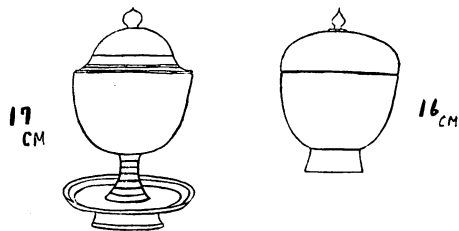
前方後円墳の竪穴式石室及び長持型石棺と言うようなものをこの間に入れるべきではありますが、省略しまして今度は方形墳であり、空堀でめぐらして、大きな石室を作った石舞台古墳、それに对照しまして群馬県の蛇穴山古墳、この場合は巨石の自然石をごくわずかな支点を合わせただけで積みあげられている。こちらは非常にきれいな切石造りで、現地をごらんになった方にはすぐおわかりになると思いますが、ごらんにならない方でもだいたいこういう部屋に似た石室の構造であるということを連想して頂くとよく分ります。関東地方にそうした古墳が残っておりませんと同時に、畿内地方にもまた切石造りの非常にきれいな構造の横穴式石室とか、もう石室がなくて石棺だけがあって、その石棺の小口に孔をあけて木棺でも挿入したのではないかと考えられるものがあります。

石の蓋が残るお亀石古墳と言う古墳もございます。河内の富田林にあります、この古墳には石棺の両側に瓦積の遺構があります。この瓦は大体白鳳頃と考えられるものでありますが、それを抜きにいたしましたとしても、瓦の日本に伝来した時期をお考えになれば、この古墳の時代的な上限と云うものがほぼつかめるかと思えます。

遺物の点で、芝山古墳は滝口教授の調査であります、このときに、殿塚・姫塚と言う前方後円墳でいろいろの墳

輪がたくさん出ております。他の遺物に銅鏡がありますが、この銅鏡と共に頭槌大刀が出ております。この出土状態

出土銅鏡
上總金鈴塚



第4図 銅 鏡

は混乱しておりますからすでに盗掘されたことになりました。この二つの銅鏡と頭槌大刀の年代ははっきりした上限をつかむことは出来ませんが、だいたい頭槌大刀の出土地域は、関東地方を中心として時代はやはり後期の古墳を主にしております。その点でここに出てまいりますところの遺物は、中期以前の古墳にみられる現象ではないわけで、勾玉の形も、古い勾玉からずっと下って奈良時代に続く勾玉に形の変化と言うものがありまして、これは大きなよりどころになると思います。

関東地方の後期の古墳であります、金鈴塚(第4図)にもこの種類がたくさん出ています。元来この環頭大刀と言うのは、その始源が中国から出ますけれども、北鮮、あるいは南鮮、そして日本へ入りますが、日本へ入ったのち関東地方の、特に両毛を中心いたしました地域でこの形式がたくさん出てきま

す。これは頭槌と同じよう

に地域的分布がだいたい限

定されておりますが、こと

にこの環頭の変化は私自身

は第一類、第二類、第三類

とか、第一類第一式とかい

うように区別をしています

が、環頭大刀の一番最初の



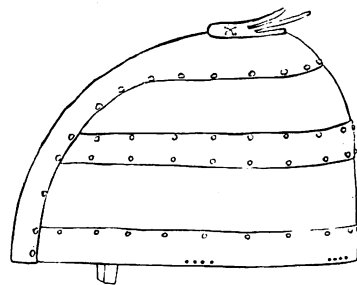
雙龍頭大刀
牙三式

川東北方
後期古墳出土

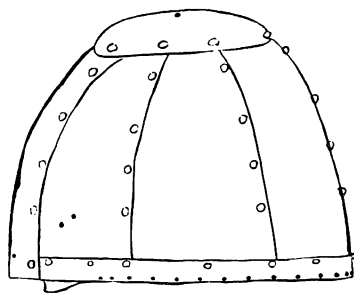
第5図 環頭大刀

スタートは、スキタイあたりにあるとおもいます。ここでは環頭大刀もあります（第5図）。

日本の関東地方あたりで作られるようになりますと、この変化がかなりはっきりしております。しかも朝鮮を仲介としまして、この環頭大刀のうつりかわりところが考古学上の資料としてはかなりはっきりとつかめます。もう一つは正



(1)



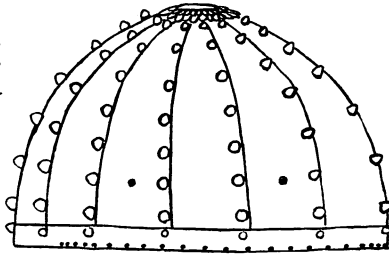
(2)

第6図 衝角付冑

倉院宝物の記録東大寺献物帳に「高麗劍」そして「頭環頭をなす」という記事がありますから、正倉院に、やはり環頭大刀がありました。ですから時代を横にならべまして、これらの出土する古墳との関係を解くことができると思います。この銅鏡は関東では古墳から出てまいり、畿内地方では法隆寺とか東大寺に伝世品でさかんに使われております。関東の古墳にこういうものが出るけれど畿内の古墳ではこうした出土例は今日まで報告されておりません。この四十年あまりの間に報告されておればわれわれも知ることになると思いますが、まだそのことを聞きませんので、まず畿内地方の古墳ではこれらを副葬する時期を過ぎていたのではないか、逆に関東では芝山とか、金鈴塚以外に、明治、大正にかけての報告をみますと、なおいくつか出ています。私がひとつの目標をもって、日本の古墳から出てまいりますところの、上代甲冑の復原研究を十年あまりやったことがあります、このときに一番最初に感じましたことは、畿内を中心にして全国的に衝角付冑が出てきます。これはやはり衝角付の第一類第一式ともいえるべきものでありますが、形式変化をおこしてきます。

さきほど（第6図）(1)の衝角付冑は全国的な分布をみますが、(2)の形式は関東地方で出土しまして近畿地方なり、その他の地方ではあまりこの形式はみません。あまりというよりは分布の中心は関東地方の特に両毛を中心とした地域に、

古式・武家時代
星・胃



第7図 星 胃

に楽になります。(1)の場合には省略的な構造を使い、(2)の場合には進歩的な構造に発展することになります。これと同じ胃をかぶった埴輪が茨木県の下高津と言う所から出ております。しかもこの埴輪の胃は後世のいう星胃でありまして、この星胃(第7図)の形式で挂甲を着ていて、だんだんと上代甲胃が変化していく過程の中に色々の部分的变化を起しますが、星と申しますと、鉄板を組み合わせる鉦ですが、この鉦がだんだんと装飾化して大きくなる。いわゆる星のように見えるものですから星胃と呼んでいます。挂甲の種類や構造につきましては、今私の方の資料室に復原模造が出来ていきますから、あとで御覧願います。

だいたい平安朝頃と漠然申しますと、延喜・天曆・天慶の時期に、日本の胃の形式変遷がありまして、武家時代の胃のひとつの様式となります。先程申しましたよ

あるいは両毛、両縁を中心とした地域に多いように思われます。先の場合には頂辺と衝角部が一連になっておりまして、小さく切った鉄板と小札を小さな鉦で留めて、頂辺に三尾鉄をつけている。この場合には三尾鉄をつけるために四つの穴をあけて、それへ紐でもってとりつけ、うしろに鳥の羽か、スキの穂のようなものをつけていたようでありませう。これは発掘の現場でみますとよくわかります。(2)の場合になりますと、頂辺でもと一連であった衝角部がここで切れます。それからつくり上げていくところの板枚数が非常にあらくなくなります。全部において手法上の省略が考えられます。概ねこの胃の出土するときには銅鉦を伴いません。あるいは銅鉦のほかに鏝頭大刀の第三式のようなものを伴う場合が多いのであります。鏝(しころ)は、(1)の場合には四つずつ穴がありまして、四筋の威皮でもって三カ所であらさげます。ところが、(2)の時期になりますと、等間隔に穴をあけて、それにかなり巾のある小札をつけます。(1)の場合には小札でなくて一枚の中のある板を丸くしましてあらさげます。そういう点でこの構造は省略的な方法を使い、そして(2)の方は前よりは、手数をかけている、だけれどもこの場合には上下の伸縮とか遊動が非常に楽になります。(1)の場合には省略的な構造を使い、(2)の場合には進歩的な構造に発展することになります。これと同じ胃をかぶった埴輪が茨木県の下高津と

うに、ずっと形式変化をこらんになっていたと思いますと、ここになんらかのヒントが得られるのではないかと思えます。かような意味で日本の古墳の始まりを考えるにはやはり弥生式文化の発展状態、あるいは弥生式文化の内容の充実というようなことを重視しなければならぬと思えますが、それに付帯して、古墳の築造と池溝の開鑿事業がともなうてまいります。ですから古墳の築造という土木事業と、池溝の開鑿は農業土木の事業と切りはなして考えることは出来ないと思えます。いま申しましたように、古墳形式の地域的特色および遺物の分布状態、したがって関東で多くの遺物が出ましても、同じものが畿内地方とか中国・九州で出るということにはなりません。たまたま出ましてもそのパーセンテージは非常に低いことになりますので、ただいま申しましたことは、はなはだ雑漢でありましたけれども、それを御参考に皆様方の御研究を進めていただき、いつかまたそれを私が学ぶというようになればたいへんけっこうだと思います。それから申し落しましたが、こういうことに着眼されました文献といたしまして、「方形周溝墓とその提起する諸問題」という論文が『歴史教育』の第十五巻の三号に下津谷君が書いておられます。あるいは『考古学研究』に「古墳発生前における社会」が収録されており、やはりこういうところへの着眼が実を結ぶ時期がくるのではないかと思えます。なおつけくわえておきたいのは十月二十八日付の新聞に、藤沢君等が調査されている土師器を埋めた古墳の記事が出ております。勝部の遺跡では出土の木棺の形をそのまま石棺にうつせば、古墳時代の石棺が出来るようなものがあります。それは藤井直正君が担当して調査をしておられますから、藤井君にくわしく御聞きになれば御参考になると思えます。

(昭和四二年度日本考古学協会大会公開講演筆記)